View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学校高学年児童の発達障害傾向と内在化問題との関連
Author(s)	森山，慶；問田，智也；藤木，大介
Citation	学習開発学研究 , 13 : 87 - 96
Issue Date	2021-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/50810
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050810
Right	Copyright (c) 2021 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	

小学校高学年児童の発達障害傾向と内在化問題との関連

森山　　慶[1]・問田　智也[2]・藤木　大介
（2020 年 11 月 30 日受理）

Relation of Developmental Disorder Tendency and Internalizing Problems in Higher Grade Elementary School Children

Kei MORIYAMA[1] , Tomoya TOITA[2] and Daisuke　FUJIKI

Abstract: The purpose of this study was to examine whether developmental disorder tendency such as ADHD and ASD tendency are related to internalizing problems through teacher teaching attitudes and school life events, targeting higher grade elementary school children enrolled in regular classes. Higher grade elementary school children (*N*=206) completed a self-report questionnaire concerning their teacher teaching attitudes, their daily experiences with schoolwork and their relationships with friends and classroom teacher at school, their self-esteem, and internalizing problems. Their homeroom teachers (*N*=9) rated each children's developmental disorder tendency. As a result of path analysis, it became clear that developmental disorder tendency to be related to internalizing problems through mediating teacher teaching attitudes, school life events, and self-esteem.

Key word: developmental disorder tendency, internalizing problem, teacher teaching attitude, life event, self-esteem
キーワード：発達障害傾向，内在化問題，教師の指導態度，ライフイベント，自尊感情

問題と目的

平成 19 年 4 月より学校教育法の中に特別支援教育が位置づけられ，障害のある子どもの教育的ニーズを把握し，生活や学習場面での困難さを克服するための適切な指導および支援を行う教育体制が進められてきた。特別支援教育では，特別支援学校や特別支援学級だけでなく通常学級においても発達障害を有する児童・生徒への適切な指導および支援が重要である。日本全国の公立小中学校では，発達障害の可能性があると推定される児童・生徒の割合は 6.5%にのぼり（文部科学省，2012），各学級に 2，3 人の割合で在籍する可能性があることが示されている。したがって，通常学級での特別支援教育の体制を充実させることは今後ますます重要になってくると言えるだろう。

その中でも特に，注意欠陥／多動性障害(Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder：以下 ADHD とする)や自閉症スペクトラム（Autism Spectrum Disorder：以下 ASD とする）の子どもに対する適切な指導および支援に多くの関心が寄せられている。ADHD は，年齢あるいは発達に不釣り合いな不注意および多動性・衝動性を主な行動特徴とする発達障害である。不注意で落ち着きがなく衝動的な行動をとる，あるいは知的水準は高いのに成績が伴わない，集団行動をとることが難しいといった特性があり，教育現場において適切な指導および支援が求められている。一方 ASD は，年齢あるいは発達に不釣り合いな他人との社会的関係の困難さ，言葉の発達の遅れ，興味や関心が狭く特定のものにこだわる等の行動を特徴とした

[1] 広島大学大学院教育学研究科
[2] 広島大学教育学部

発達障害である。文部科学省(2012)の調査では，公立小中学校で通常学級に在籍する ADHD と ASD の可能性が推定される児童・生徒の割合は前者が 3.1%，後者が 1.1%にのぼると示されている。

ADHD や ASD の子どもは，その障害にもとづく困難さがあるだけでなく二次障害に直面しやすいことが知られている。ADHD の子どもは，障害特有の行動特徴に加え，自身を取り巻く教育環境や養育環境との相互作用によって，特に，抑うつや不安といった内在化問題を発現する可能性が高まることが指摘されている(齊藤・青木，2010)。ADHD の子どもは，不注意や多動といった行動特徴ゆえに他者からの注意や叱責を受けたり，友達に仲間外れにされたりすることが多くなり，その結果，ネガティブな感情が蓄積され，学校場面では不登校といった問題の生起につながる可能性があると言える。また，ASD の子どもも，コミュニケーションや対人関係に関する課題を抱えており，不安障害や抑うつといった内在化問題を抱える可能性が高いことが示されている（Levy, Mandell, & Schultz, 2009）。

加えて，医学的な診断を受けてはいないが ADHD 傾向や ASD 傾向を示す子どもが通常学級に在籍しており，それらの子どもの ADHD 傾向や ASD 傾向と適応や内在化問題との関連についても明らかにされている。例えば，野田他(2013)は，通常学級に在籍する児童・生徒の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの間に正の相関があることを示した。このことは，ADHD の医学的診断に関わらず子どもの不注意および多動性・衝動性と情緒的な問題との関連について検討することの重要性を示している。また，韓他（2017）は，ASD 臨床群に含まれる子どもだけではなく，診断されていない子どもでも ASD の行動傾向が高いと，指示を聞き間違える，自分の伝えたいことを相手に正確に伝えられないなどの行動が多くなると示している。これは学校生活で学習や集団行動を行う上で，困難を感じる経験につながる可能性があり，ASD 傾向を示す子どもも内在化問題を抱える可能性が高いと考えられる。

内在化問題に至るまでに介在する要因　では，ADHD 傾向や ASD 傾向と内在化問題との関連にはどのような要因が介在しているだろうか。第 1 に，自尊感情の低下を媒介して内在化問題の発現が促進されることが挙げられる。松本・山崎(2007)は，不注意および多動性・衝動性傾向の強い児童はそうでない児童に比べ自尊感情が低い傾向にあることを示している。また，松野・山崎（2017）は，ASD 傾向の高い者は理想自己と現実自己のズレが原因で，自尊感情が低下することを示した。自尊感情の低さは内在化問題を予測する要因である(Sowislo & Orth , 2013)ことから，ADHD 傾向や ASD 傾向を示す子どもは不注意や多動・衝動といった行動特徴，あるいは，コミュニケーションや対人関係での困難さといった特性ゆえに，注意や叱責を受けるといったネガティブな経験をすることで自尊感情が低下し，結果，抑うつといった内在化問題の発現へとつながる可能性が考えられる。

第 2 に，子どもは 1 日のうちの多くの時間を学校で過ごすことから，学校生活における要因の介在が考えられる。ADHD の子どもは，注意力や集中力が必要な課題への苦手さといったことから成績不振や，それに伴う学習意欲の低下など，学業面でつまずきや仲間外れなど友人関係に困難を示すことが報告されている。これらのことから ADHD 傾向を示す子どもについても，その行動特性から，課題をこなすことができない，授業内容についていけないといった学業面でのつまずきや仲間外れといった友人関係における困難さを抱えていると考えられる。よって，ADHD 傾向を示す子どもは，学業や友人関係でネガティブな経験に直面しやすいことが予想され，そのネガティブな経験の積み重ねが自尊感情の低下を介して内在化問題の発現に関連することが考えられる。一方 ASD の子どもについても，想像性の障害や言語理解に偏りがあるといわれており，学業面でのつまずきがしばしば見られることやコミュニケーションや対人関係に関する課題があることを考えると，ASD 傾向を示す子どもも，授業内容が理解できないといった学業面でのつまずきや日々の学校生活において空気が読めなかったり，自分から話しかけられなかったりして仲間はずれなどの友人関係での悩みが多いことが予想されるだろう。したがって，ASD 傾向示す子どもについても，学業や友人関係におけるネガティブな経験の積み重ねにより自尊感情の低下を介して内在化問題の発現に関連することが考えられる。

第 3 に，教師の指導態度に関する要因の介在が考えられる。西野(2007)では，教師の指導態度が子どもの情動的な問題行動に影響を及ぼすかどうか検討している。この研究では，自己価値を自尊感情と同義のもとして扱い，教師の指導態度が自己価値に対して直接影響を及ぼす要因であることが示された。したがって，教師の指導態度は子どもの自尊感情に影響を及ぼす要因であることが予測される。ただし，西野(2007)の研究は，ADHD 傾向や ASD 傾向の子どもを対象とはしておらず，ADHD 傾向及び ASD 傾向の子どもの自尊感情や内在化問題と教師の指導態度の関連を検討した知見は得られていない。

ADHD の子どもは，その行動特性から，授業を集中して受けることが難しい，忘れ物をする，といった場合が見受けられ，教師から「気になる子」として見られることが多々ある。強い ADHD 傾向を示す子どもについても同様に，教師の指導態度に関して，注意や叱責といったネガティブな経験に直面することが多いと予想される。一方 ASD の子どもでも，教師の指示や説明を理解することが難しかったり，先生の急な予定変更にうまく対応できなかったりすることが示唆されている（佐藤・山田・宮城, 2014）。つまり，教師の指導態度に対してネガティブなイメージを抱く可能性が高いと考えられる。このように，ADHD 傾向や ASD 傾向を示す子どもは，教師の指導態度に対してネガティブな経験に直面することが多いと予想される。加えて，教師との関係においてもネガティブな経験に直面する可能性が高いことも予想される。したがって，教師の指導態度や学校生活における教師との関係と ADHD 傾向及び ASD 傾向や自尊感情，内在化問題との関連に着目することは重要であると言える。

先行研究の課題と本研究の意義　先行研究において齊藤(2015)は，通常学級に在籍する中学生を対象とし，不注意および多動性・衝動性が学業，友人関係といった学校ライフイベント，さらには自尊感情を媒介して内在化問題と関連するかどうかを検討している。その結果，不注意および多動性・衝動性傾向を示す子どもは，学校でのネガティブな経験をしやすくなり，その積み重ねにより自尊感情の低下が起き，内在化問題の発現に至ることが示唆された。しかし，齊藤(2015)では，中学生の不注意および多動性・衝動性と内在化問題との関連を検討しており，児童期の子どもを対象とした研究は日本では行われておらず，十分な知見は得られていない。

ADHD の子どもは児童期に情緒的な問題を抱えたり不適応を示したりすることが指摘されている(齊藤，2009)。特に，小学校高学年になると自分を客観的に捉えられるようになる(外山・桜井，2009)ことで，ADHD 特有の特性によるネガティブな経験により，自分を否定的に捉えるようになってしまう可能性が考えられる。また，ADHD 傾向を示す子どもについても同様に，身体的・心理的に変化を迎える小学校高学年の発達段階において，自分を否定的に捉え，抑うつや不安といった二次的な内在化問題を抱えやすいことが考えられる。抑うつなどの内在化問題が原因で不登校などになることを予防するためにも，小学校高学年における ADHD 傾向と抑うつなどの内在化問題との関係やそのメカニズムを明らかにすることは重要であると言える。

また，ADHD 傾向と内在化問題との介在要因としての学校関連要因について，学業や友人関係を扱った研究はあるが(齊藤，2015)，教師との関係や教師の指導態度の認知がどのように関連するかどうかを検討した研究は行われていない。特に小学校では学級担任制をとっている学校が多く，教師との関わりも中学校と比べ多くなってくるため，教師の指導態度や教師との関係といった要因に注目することは重要であると言える。

さらに，DSM-5 以降，ADHD と ASD との併存が認められるようになり，ADHD と ASD の両方の有病率も増加傾向にあることが指摘されている。また，ADHD や ASD 等の発達障害傾向はスペクトラムをなしていると考えられているため，医学的な診断の有無という見方だけでなく，障害傾向の連続的な見方をする必要がある（田中他，2014）。さらに，ADHD 傾向と ASD 傾向は高い相関を示すことが明らかにされており（田中他，2014），一方の発達障害傾向と内在化問題との関連は，もう一方の発達障害傾向の影響によってもたらされるものである可能性がある。したがって，ADHD 傾向と ASD 傾向を同時に扱う必要があると言える。しかし，これまでの研究では，ADHD 傾向と内在化問題との関連は検討されているが（齊藤，2015），ASD 傾向と内在化問題の関連や ADHD 傾向と ASD 傾向の両変数を扱った時の内在化問題との関連は検討されていない。小学校高学年児童の各発達障害傾向と内在化問題との関連メカニズムがわかれば，ADHD 傾向や ASD 傾向を示す児童の学校生活での実態がわかり，抑うつや不安といった内在化問題，さらには，不登校の予防につながる知見が得られるだろう。

本研究の目的　以上より，本研究では，通常学級に在籍する小学校高学年児童を対象とし，ADHD 傾向及び ASD 傾向と学業ネガティブイベント，友人関係ネガティブイベント，教師関係ネガティブイベントからなる学校ライフイベント，教師の指導態度認知，自尊感情，内在化問題との関係を明らかにする。具体的には，各発達障害傾向と内在化問題との関連メカニズムについて，ADHD 傾向と ASD 傾向が教師の指導態度，学校ライフイベントに関連し，さらにそのことに関する自尊感情の低さを媒介して内在化問題へと関連する，という仮説を検討する。

方法

調査対象者

島根県内の公立小学校 3 校の第 5，6 学年の通常学級に在籍する 226 名の児童およびその学級担任教員 9 名に調査協力を求めた。このうち，教員評定ならびに児童評定が揃い，かつ欠損値の見られなかった合計 206 名の回答を分析の対象とした。

材料

教師と児童の両方に質問紙を用いた。教師に対しては，子どもに ADHD 傾向や ASD 傾向があるかを調べるために ADHD 傾向尺度及び AQ 尺度からなる質問紙を用いた。児童に対しては，学校生活での様子や思いを調べるために教師の指導態度，学校ライフイベント，自尊感情，内在化問題を測定する尺度からなる質問紙を用いた。両質問紙の表紙には，質問紙に関する説明，調査参加への同意確認，学年，学級，出席番号，性別，質問紙への回答にあたっての注意事項を記した。

ADHD 傾向　小学生の ADHD 傾向を測定するために，ADHD Rating Scale(ADHD-RS ; DuPaul, Power, Anastopoulos, & Reid, 1998 市川・田中, 2008)を用いた。本研究では ADHD-RS 教師評定版を使用した。この尺度は，ADHD の主症状である「不注意(9 項目)」と「多動性・衝動性(9 項目)」の 2 つの下位尺度から構成されているが，本研究では，回答者の負担を考慮し，各下位尺度で負荷量の大きい項目をそれぞれ 5 項目ずつ選び，不注意 5 項目と多動性・衝動性 5 項目の構成とした(Table 1)。回答は，子どもの特徴を記述した各項目に対して，「ない，もしくはほとんどない(0 点)」，「ときどきある(1 点)」，「しばしばある(2 点)」，「非常にしばしばある(3 点)」の 4 件法で尋ねるものであった。得点が高いほど ADHD 傾向が高いことを示す。本研究では，不注意 5 項目と多動性・衝動性 5 項目の 10 項目の合計得点を ADHD 傾向の指標として算出した。

Table 1　不注意および多動性・衝動性尺度の項目

不注意
1 日々の活動で忘れっぽい
3 指示に従えず，課題や任務をやり遂げることができない
5 学業において，綿密に注意することができない，または不注意な間違いをする
7 課題や活動を順序立てることが難しい
9（学業や宿題のような）精神的努力の持続を要する課題を避ける
多動性・衝動性
2 順番を待つことが難しい
4 しゃべりすぎる
6 質問が終わる前に出し抜けに答え始めてしまう
8「じっとしていない」，またはまるで「エンジンで動かされているように」行動する
10 他人を妨害したり，邪魔をする

注:左端の数字は項目順を示す。

Table 2　児童用 AQ 尺度の項目

社会的スキル
1 新しい友人を作ることは，苦手である
9 何かをするときには，一人でするよりも他の人といっしょにすることを好む*
注意の切り替え
4 一つのことに夢中になって，ほかのことがぜんぜん目に入らなくなることがよくある
5 新しい場面（状況）では不安を感じやすい
細部への注意
7 他の人が気づかないような小さい物音に気がつくことがしばしばある
8 数字（番号）に対するこだわりがある
コミュニケーション
2 自分が話をしているときには，なかなか他の人に横から口をはさませない
3 冗談が分からないことがよくある
想像力
10 お話（ストーリー）をすぐ作ることができる*
6 特定の種類（カテゴリー）のもの（たとえば，自動車，鳥，植物など）についての情報を集めることが好きだ

注:左端の数字は項目順を示す。(*は逆転項目)

Table 3　学校ライフイベント尺度の項目

友人関係
2 友だちとけんかをした
3 いつも同じ友だちとよくあそんだ
7 友だちに急に仲間はずれにされた
8 友だちのじょうだんがわからなかった
学業
1 急にじゅぎょうの予定が変わってとまどった
4 おもしろくない授業に集中できなかった
5 テストの結果が良かった*
教師関係
6 先生にしかられたが理由がわからなかった
9 じゅぎょうが長引いて，休み時間がへった
10 先生に注意されても忘れ物がへらなかった

注：左端の数字は項目順を示す。(*は逆転項目)

Table 4　教師の指導態度認知尺度の項目

教師の態度
1 先生の言うことは，いつも納得できる
2 授業の内容は，みんながわかる
3 先生の指示や言っていることは，わかりやすい
4 先生は，規則を破った児童をいつでも平等に，注意する
5 先生はわたしたち児童に期待している
6 先生は，私たちにどんな課題にでもどんどん取り組んでほしいとおもっている

注:左端の数字は項目順を示す。

Table 5　自尊感情尺度の項目

学習能力評価
7 じゅぎょう中に問題をとくことはむずかしい*
13 学校の勉強を終わらせるのがとても速い
15 勉強がよくできると思う
運動能力評価
1 スポーツならなんでもよくできる
10 したことのない運動でもうまくできると思う
14 同じ学年の友だちよりもスポーツがよくできると思う
友人関係評価
5 友だちに人気がある
8 たくさんの友だちがいる
9 何かするときはいつもたくさんの友だちと一緒にする
道徳性評価
2 自分のやり方が気に入らないことがよくある*
6 いつも自分が問題をおこす*
12 やってはいけないとわかっていることをする*
全体的自己価値観
3 一人の人として自分にまんぞくしている
4 自分の生き方が好きではない*
11 今のままの自分にとてもまんぞくしている

注：左端の数字は項目順を示す。(*は逆転項目)

学校ライフイベント　小学生用学校ストレッサー尺度(嶋田，1998)ならびに ADHD の子どもの学校生活に関する事例報告や手記を参考に，小学校生活における出来事として，友人関係 4 項目，学業 3 項目，教師関係 3 項目の合計 10 項目を作成した(Table 3)。そして，これらの出来事の最近 6 ヶ月間での頻度について，児童自身で回答するものとした。回答は，「全然なかった(1 点)」，「あまりなかった(2 点)」，「あった(3 点)」，「よくあった(4 点)」の 4 件法で尋ねた。分析では，ポジティブイベントの各項目の得点を逆転させた後，友人関係，学業，教師関係のそれぞれの合計得点を各学校ライフイベントネガティブ得点とした。得点が高いほどネガティブイベントの経験頻度が高く，ポジティブイベントの経験頻度が低いことを示す。

教師の指導態度認知　日本版 CES(平田・渡部・相馬，1998)の「教師の態度」因子のうち，西野(2007)で使用され，平田他(1998)の因子分析の結果で因子負荷量の高かった 6 項目を教師の指導態度認知を測る尺度として使用した(Table 4)。回答は，各項目の記述があてはまる程度について，「まったくそう思わない(1 点)」，「そう思わない(2 点)」，「どちらでもない(3 点)」，「そう思う(4 点)」，「とてもそう思う(5 点)」の 5 件法で尋ねるものであった。得点が高いほど教師の指導態度に対してポジティブな印象を持っていることを示す。

自尊感情　改定・自己知覚尺度児童版(眞榮城・菅原・酒井・菅原，2007)のうち，学業能力評価，運動能力評価，友人関係評価，道徳性評価，全体的自己価値観について，眞榮城他(2007)の因子分析の結果で因子負荷量の高かった 3 項目ずつ合計 15 項目を使用した(Table 5)。回答は，各項目の記述が当てはまる程度について，「あてはまる(4 点)」，「ややあてはまる(3 点)」，「ややあてはまらない(2 点)」，「あてはまらない(1 点)」の 4 件法で尋ねるものであった。本研究で使用した 15 項目の合計得点を自尊感情得点として使用した。得点が高いほどその側面に自信があると自分自身で評価していることを示す。

内在化問題　Strengths and Difficulties Questionnaire（SDQ ； Goodman, 1997）の日本語版である子どもの強さと困難さアンケートの 25 項目のうち，抑うつや不安などの情緒の問題に関する 5 項目を使用した（Table 6）。回答は，各項目の記述があてはまる程度について，「あてはまらない（1 点）」，「まあまああてはまる（2 点）」，「あてはまる（3 点）」の 3 件法で尋ねるものであった。本研究では，5 項目の合計得点を内在化問題得点として使用した。得点が高いほど強い内在化問題を抱えていることを示す。世界的に標準化され使用されている尺度であるため，原尺度に従い 5 項目の合計得点を内在化問題の指標として使用した。

Table 6　内在化問題尺度の項目

1	私は，よく頭やお腹がいたくなったり，気持ちが悪くなったりする
2	私は，心配ごとが多く，いつも不安だ
3	私は，おちこんでしずんでいたり，涙ぐんだりすることがよくある
4	私は，新しい場面に直面すると不安になり，自信をなくしやすい
5	私は，こわがりで，すぐにおびえたりする

注：左端の数字は項目順を示す。

手続き

調査者が各協力校の教頭に調査内容の説明と依頼を行い，調査実施の了承を得た。調査は教員評定，児童評定ともに 2018 年 10 月中旬～12 月に実施された。教員評定については，校長または教頭を通じて各学級担任教員への依頼を行い，ADHD-RS 及び AQ に回答してもらった。児童評定は，児童に教師の指導態度認知，学校ライフイベント，自尊感情，内在化問題に対する質問に順に回答してもらった。各学級担任教員を通じて児童への調査を依頼し，教員が集団での調査を実施した。調査をするにあたって，質問紙への回答は任意であること，回答を調査者以外が見ることはないことを質問紙の表紙に記載した。調査は無記名で行ったが，教員評定と児童評定との照合を行うため，教員と児童の両者に学級，出席番号，性別を記入してもらった。

結果と考察

各変数の記述統計量

Table 7 は，本研究で使用した各変数の平均値，標準偏差ならびに性別と学年の 2 要因分散分析を行った結果を示している。ADHD 傾向では男女間で有意な差が見られ，女子に比べ男子の方の得点が高かった。中学生における ADHD 傾向得点も男子の方が高いことから（齊藤，2015），不注意や多動・衝動性といった行動傾向が女子に比べ男子で目につきやすいと考えられる。また，ライフイベントの友人関係ネガティブイベントでは学年間で有意な差が見られ，6 年生に比べ 5 年生の得点の方が高いことが示された。5 年生は認知発達段階における過渡期でもあるため，より友人関係における問題が生じやすいと考えられる。さらに，ライフイベントの教師関係ネガティブイベントにおいて男女間で有意な差が見られ，女子に比べ男子の方の得点が高かったことから，男子の方がより担任教師との関係においてネガティブな経験に直面しやすい可能性が伺える。一方その他の変数において性別ならびに学年での有意な差は見られず，すべての変数において性別×学年の有意な交互作用は見られなかった。

各変数間の関連

ADHD 傾向及び ASD 傾向と各変数との関連を検討するために相関分析を行った（Table 8）。ADHD 傾向と ASD 傾向はいずれも教師の指導態度認知得点との間に有意な負の相関を示した（ADHD 傾向：r=-.37；ASD 傾向：r=-.24，いずれも p ＜ .01）。また，ADHD 傾向と ASD 傾向はいずれも学業ネガティブイベント得点との間に有意な正の相関を示し（ADHD 傾向：r=.17；ASD 傾向：r= .14，いずれも p ＜ .01），教師関係ネガティブイベント得点との間にも有意な正の相関を示した（ADHD 傾向：r=.41；ASD 傾向：r= .20，いずれも p ＜ .01）。一方，友人関係ネガティブ得点に対しては ADHD 傾向で有意な正の相関を示した（ADHD 傾向：r=.27，p ＜ .01）。さらに，ASD 傾向は自尊感情との間に有意な負の相関を示した（ASD 傾向：r=-.20，p ＜ .01）。内在化問題では，ADHD 傾向と ASD 傾向のどちらも相関を示さなかった。

Table 7 各変数の性別・学年の平均値と標準偏差(N = 206)

	全体	5年生		6年生		性差	学年差
		女子	男子	女子	男子	F値	F値
ADHD 傾向	5.59 (7.10)	3.06 (4.45)	8.05 (8.41)	3.38 (5.04)	8.05 (7.93)	18.13**	0.02
ASD 傾向	9.48 (4.03)	8.81 (4.28)	9.90 (4.10)	9.75 (3.26)	10.05 (3.43)	1.04	0.64
教師の指導態度認知	22.67 (4.24)	23.27 (4.08)	22.21 (4.54)	22.33 (4.14)	22.57 (3.71)	0.33	0.16
学業イベント	6.90 (1.75)	6.81 (1.75)	6.95 (1.71)	7.04 (1.33)	6.86 (2.33)	0.01	0.05
友人関係イベント	9.16 (2.27)	9.33 (2.29)	9.50 (2.12)	8.63 (2.46)	7.81 (2.14)	0.73	10.12**
教師関係イベント	6.62 (2.02)	6.04 (1.87)	7.28 (1.83)	5.96 (1.97)	6.95 (2.54)	11.60**	0.39
自尊感情	39.47 (6.82)	40.00 (7.02)	39.46 (6.33)	37.00 (5.70)	40.33 (8.68)	1.48	0.86
内在化問題	7.98 (2.35)	8.32 (2.64)	7.72 (1.96)	7.71 (2.18)	8.00 (2.78)	0.15	0.17

**$p < .01$

Table 8 各変数間の相関係数(N = 206)

	1	2	3	4	5	6	7
1 ADHD 傾向							
2 ASD 傾向	.51**						
3 教師の指導態度認知	-.37**	-.24**					
4 学業イベント	.17**	.14*	-.34**				
5 友人関係イベント	.27**	.12†	-.22**	.33**			
6 教師関係イベント	.41**	.20**	-.45**	.48**	.43**		
7 自尊感情	-.10	-.20**	.34**	-.46**	-.32**	-.44**	
8 内在化問題	-.01	.09	-.14*	.26**	.27**	.23**	-.45**

** $p < .01$, * $p < .05$, †$p < .10$

仮説モデルに対するパス解析

Table 8 で示す相関分析の結果を踏まえ，ADHD 傾向及び ASD 傾向から学校ライフイベント（学業ネガティブイベント，友人関係ネガティブイベント，教師関係ネガティブイベント），教師の指導態度認知に関連する自尊感情の低さを媒介して内在化問題へと関連する仮説モデルを検討するために HAD（清水，2016）を用いてパス解析を行った（Figure 1）。

まず，ADHD 傾向と ASD 傾向との関係において田中他(2014)でも見られたように両変数の間に高い相関が見られた。また，ADHD と ASD の両方の有病率の増加傾向が指摘されており，この結果から ADHD 傾向と ASD 傾向は併発している場合が多いことが示唆されたと言える。この児童は ADHD 傾向がある，あるいは ASD 傾向があるといった独立的な見方だけでなく，両発達障害傾向を併発している可能性を考慮して指導に臨む必要性があると言える。

次に，ADHD 傾向及び ASD 傾向と各学校ライフイベントとの関連を見てみると，ADHD 傾向からは友人関係イベントと教師関係イベントに対し有意なパスが見られ，ADHD 傾向の得点が高いと友人関係ネガティブイベントや教師関係ネガティブイベントの各得点が高くなることが示された。ADHD 傾向を示す児童は衝動・多動的な振る舞いなどの理由から友だちに仲間外れにされるといった友人関係での困難さや理由も分からず先生に叱られるといった教師との関係でネガティブな経験に直面しやすくなることが示唆された。こうした日常的に学校生活でのネガティブな経験に直面しやすくなる可能性については，齊藤（2015）の研究でも同様な示唆が得られている。しかし，齊藤（2015）では ADHD 傾向を示す中学生は学業面でつまずきやすいことが示唆されていたが本研究では同様な結果は得られなかった。この結果については，本研究では対象が小学校高学年の児童であったことが要因の 1 つと考えられる。ADHD 傾向の児童は小学校段階では学業面で困難さを

抱えるまでにはいかなくとも，中学校に上がり学習内容が難化していくことで学業でのつまずきが生じてくると考えられる。一方で，ASD 傾向から学業イベントに対し有意なパスが見られ，ASD 傾向の得点が高いと学業ネガティブイベントの得点が高くなることが示された。小学校高学年の児童では ADHD 傾向の特性より ASD 傾向特有の特性が学業においてネガティブな影響を与えると言え，ASD 傾向を示す児童は，面白くないと感じる授業に集中できなかったり，授業中の先生の指示の意図が理解できなかったりと授業内容を理解することに困難さを抱えている可能性がある。

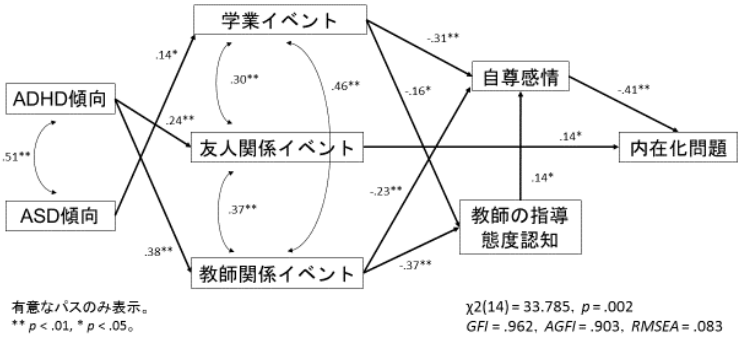

Figure 1．ADHD傾向，ASD傾向，教師の指導態度，学業イベント，友人関係イベント，教師関係イベント，自尊感情，内在化問題に関するパス解析の結果

また，学業イベントと教師関係イベントから教師の指導態度認知への有意な負の影響が見られ，学業ネガティブイベント，教師関係ネガティブイベント得点が高いと教師の指導態度を評価する得点が低いことが示された。ASD 傾向の児童は授業中の先生の指示が理解できなかったり，先生の急な予定変更に戸惑ったりすることで教師の指導態度に不信感を抱くようになることが考えられる。また ADHD 傾向を示す児童は学校生活において理由も分からず先生に叱られるといったネガティブな経験に直面することで，教師の指導態度に対して否定的な捉え方をするようになる可能性があると言える。

さらに，教師の指導態度認知から自尊感情に対し正の影響が見られ，教師の指導態度を評価する得点が低いと自尊感情が低いことが示された。この結果から，ADHD 傾向や ASD 傾向を示す児童は，自分ばかりが先生から注意を受ける，先生は自分に期待していないなどと感じることで，自分に価値がないなどと思っている可能性が考えられる。また，学業イベントと教師関係イベントから自尊感情への有意な負の影響が見られ，各ネガティブイベント得点が高いほど自尊感情が低くなることが示された。このことから，ADHD 傾向の児童は教師との関係において，また ASD 傾向の児童は学業面においてネガティブな経験に直面することで自分を否定的に捉えてしまう感情が生じやすくなると考えられる。一方で，ADHD 傾向を示す児童で友人関係イベントから自尊感情への影響は示されなかった。先行研究において ADHD 傾向を示す中学生は友人関係におけるネガティブな経験から自尊感情が低下する可能性が示唆されている（齊藤，2015）が，本研究では調査対象が高学年の児童であり，ADHD 傾向を示す児童は友人関係要因よりも教師関係要因の方が自尊感情の低下を招く主な要因であることが考えられる。

加えて，内在化問題に対し友人関係イベントから正のパスが，自尊感情から有意な負のパスが確認され，友人関係でネガティブイベントに直面するほど，あるいは自尊感情が低いほど高い内在化問題得点を示すことが明らかになった。ADHD 傾向を示す児童はその特性ゆえに，友人関係でのネガティブな経験が直接的に内在化問題に影響することや，ASD 傾向は学業面で，ADHD 傾向は教師との関係でネガティブな経験を積み重ねることによる自尊感情の低下によって内在化問題の発現に至る，というメカニズムが示されたと言える。一方で，齊藤(2015)では ADHD 傾向を示す中学生は学業イベントから内在化問題へ直接有意な正のパスが見られたが，本研究において ASD 傾向を示す高学年児童は学業でのつまずきが直接内在化問題に影響するわけではないことが確認された。この結果については，小学校高学年の児童では，学校生活において学業よりも友人関係の充実がより学校生活への適応に影響を与えることから友人関係で嫌な思いをすることでストレスを感じ不安を感じたり自信を無くしたりというように直接的に内在化問題に影響し，学業でのつまずきは内在化問題を発現する媒介変数に留まった可能性が考えられる。

本研究からの示唆

本研究では，通常学級に在籍する小学校高学年児童の ADHD 傾向や ASD 傾向と内在化問題との関連について明らかにすることができた。これまでの研究では示されてこなかった ADHD 傾向や ASD 傾向を示す高学年児童も情緒的な問題を抱えるリスクがあり，適切な指導・支援を行う必要があると言える。児童の抑うつや不登校等の問題を予防するためにも，学業や友人関係，教師との関わりなどの学校生活場面においてつまずきや苦手に感じているところに対するサポートを教員や学級集団との関わりのなかで行っていく重要性が示唆されたと言える。

また，本研究では ADHD 傾向や ASD 傾向を示す児童にとって教師との関係や教師の指導態度の認知が内在化問題を引き起こす媒介要因であるという可能性が示唆された。小学校は学級担任制をとっている学校が多く，各発達障害傾向を示す児童にとって教師の存在は自尊感情の低下やそれに伴う内在化問題の発現を抑制する可能性があることが示唆された。教師は，例えば，ADHD 傾向や ASD 傾向を示す児童に役割を与えたり，分かりやすい指示をしたりといった働きかけが重要になってくると言えるだろう。

さらに，自尊感情を維持あるいは向上させることで内在化問題の発現を抑制できる可能性があることが示唆された。ADHD 傾向や ASD 傾向を示す児童は，日常的な学校場面で失敗経験をする機会が多くなると考えられるため，自尊感情の向上につながるような成功体験の機会を増やすことが重要と考える。授業でのメリハリ，急な予定変更を行わない，分かりやすく指示を伝える，スモールステップで課題をこなしていくような工夫，友だちとの助け合いを通して自己効力感を高めたり，自分の居場所を感じることができたりするような体験を積み重ねていくことが，ADHD 傾向や ASD 傾向を示す児童の自尊感情を高め，抑うつや不安などの内在化問題を防ぐことにつながるだろう。

加えて，ADHD 傾向と ASD 傾向は併発している場合が多く，かつ，ADHD 傾向の方が困りごとにつながっていると言える。特に教師との関係や友人関係において困難に直面する可能性が高いことが示されたことから，教師はもちろんのこと周りの友だちが障害傾向特性を理解し認めることで内在化問題の発現を抑制することにつながるだろう。

今後の課題

本研究の課題として，学校関連以外の要因が検討されていない点が挙げられる。ADHD の子どもは自身を取り巻く教育環境と養育環境の相互作用により二次障害に直面しやすいことが指摘されている（齊藤・青木，2010）ことや児童期後期の子どもの ADHD 傾向が養育要因を介して抑うつへと関連するとの結果も報告されている（齊藤・松本・菅原，2016）。また，ASD や ASD 傾向と養育要因との関連を扱った研究は存在しないことからも，今後は，教師と保護者の両方の視点から捉え，教育要因と養育要因の双方を考慮に入れ検討することは必要となる。学校関連要因に加え養育要因について検討することで，より効果的で早期の介入につながる知見を得ることができるであろう。

最後に，通常学級での特別支援教育の充実を図るためにも，どんな関わり方や支援が ADHD 傾向や ASD 傾向を示す児童の内在化問題の発現を予防できるのかといった質的研究と合わせて検討を重ねていくことが重要であると言える。

付　記

本研究は，2018 年度に広島大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。調査に協力してくださった小学校の先生方，児童の皆様にお礼申し上げます。

引用文献

DuPaul, G. J., Power, T. J., Anastopoulos, A., & Reid, R. (1998). *ADHD Rating Scale-IV: Checklists, norms, and clinical interpretation*. New York：Guilford Press. （デュポール G.J.・パワーT.J.・アナストポウロス A.・リード R. 市川宏伸・田中康雄（監修）坂本 律（訳）(2008). 診断・対応のための ADHD 評価スケール ADHD-RS－チェックリスト，

標準値とその臨床的解釈－ 明石書店）
Goodman, R. (1997). The strengths and Difficulties Questionnaire：A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, *38*, 581-586.
平田 乃美・渡部 正・相馬 一郎 (1998). 非行少年の学校環境認知とローカス・オブ・コントロール 犯罪心理学研究, *36*, 1-17.
韓 昌完・矢野 夏樹・小原 愛子・權 偕珍・太田 麻美子・田中 敦士 (2017). IN-Child Record の信頼性及び構成概念妥当性の検証――横断データを用いた分析―― *Total Rehabilitation Research*, *5*, 1-14.
Levy, S. E., Mandell, D. S., & Schultz, R. T. (2009). Autism *The Lancet*, *374*, 1627-1638.
眞榮城 和美・菅原 ますみ・酒井 厚・菅原 健介 (2007). 改訂・自己知覚尺度日本語版の作成――児童版・青年版・大学生版を対象として―― 心理学研究, *78*, 182-188.
松本 陽子・山崎 由可里 (2007). 小学生における ADHD 傾向と自尊感情 和歌山大学教育学部紀要（教育科学）, *57*, 43-52.
松野 実・山崎 晃 (2017). 一般大学生の自閉症スペクトラム傾向と自己概念，情動への評価との関連 子ども学論集（広島文化学園大学大学院教育学研究）, *3*, 51-62.
文部科学省 (2012). 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について
西野 泰代 (2007). 学級での疎外感と教師の態度が情緒的な問題行動に及ぼす影響と自己価値の役割 発達心理学研究, *18*, 216-226.
野田 航・岡田 涼・谷 伊織・大西 将司・望月 直人・中島 俊思・辻井 正次 (2013). 小中学生の不注意及び多動・衝動的行動傾向と攻撃性，抑うつとの関連 心理学研究, *84*, 169-175.
齊藤 彩 (2015). 中学生の不注意および多動性・衝動性と内在化問題との関連――学校ライフイベントと自尊感情を媒介として―― 教育心理学研究, *63*, 217-227.
齊藤 彩・松本 聡子・菅原 ますみ (2016). 児童期後期の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの関連――養育要因と自尊感情に着目して パーソナリティー研究, *25*, 74-85.
齊藤 万比古 (2009). 思春期における二次障害へのケア 齊藤万比古（編） 発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート (pp. 54-73) 学習研究社
齊藤 万比古・青木 桃子 (2010). ADHD の二次障害 精神科治療学, *25*, 787-792.
佐藤 匡仁・山田 幸恵・宮城 好郎 (2014). 小学校教諭の自閉症スペクトラム児対応における「予定変更」リスク評価構造 岩手県立大学社会福祉学部研究紀要, *16*, 11-21.
嶋田 洋徳 (1998). 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房
清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD version 16.03 機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, *10*, 295-319.
Sowislo, J. F., & Orth, U. (2013). Dose low self-esteem predict depression and anxiety? A mentaanalysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, *139*, 213-240.
田中 善大・伊藤 大幸・高柳 伸哉・原田 新・野田 航・大嶽 さと子…辻井 正次 (2014). 小中学校における友人関係問題に対する ASD 傾向及び ADHD 傾向の影響の検討 精神医学, *56*, 501-510.
外山 美樹・桜井 茂男 (2000). 児童と成人におけるポジティブ・イリュージョン 筑波大学心理学研究, *22*, 191-196.
若林 明雄・内山 登起夫・東條 吉邦・吉田 友子・黒田 美穂・サイモン バロンーコーエン・サリー ウィールライト(2007). 自閉症スペクトラム指数（ＡＱ）児童用・日本語版の標準化――高機能自閉症・アスペルガー障害児と定型発達児による検討―― 心理学研究, *77*, 534-540.